

元文科初第1067号
子発1118第1号
令和元年11月18日

各 都道府県知事 殿

文部科学省初等中等教育局長
(公 印 省 略)

厚生労働省子ども家庭局長
(公 印 省 略)

「一時預かり事業の実施について」の一部改正について

「一時預かり事業の実施について」(平成27年7月17日27文科初第238号、雇児発0717第11号文部科学省初等中等教育局長、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長連名通知)の一部を別添のとおり改正し、平成31年4月1日より適用することとしたので、通知する。

については、管内市町村(特別区及び一部事務組合を含む。)に対して周知をお願いするとともに、本事業の適正かつ円滑な実施に期されたい。

一時預かり事業実施要綱新旧対照表

改正後	改正前
<p>別紙</p> <p>一時預かり事業実施要綱</p> <p>1～3 (略)</p> <p>4 実施方法 (1)～(6) (略)</p>	<p>別紙</p> <p>一時預かり事業実施要綱</p> <p>1 事業の目的 保育所等を利用していない家庭においても、日常生活上の突発的な事情や社会参加などにより、一時的に家庭での保育が困難となる場合がある。また、核家族化の進行や地域のつながりの希薄化などにより、育児疲れによる保護者の心理的・身体的負担を軽減するための支援が必要とされている。 こうした需要に対応するため、保育所、幼稚園、認定こども園その他の場所において児童を一時的に預かることで、安心して子育てができる環境を整備し、もって児童の福祉の向上を図ることを目的とする。</p> <p>2 実施主体 実施主体は、市町村(特別区及び一部事務組合を含む。以下同じ。)とする。 なお、市町村が認めた者へ委託等を行うことができる。</p> <p>3 事業の内容 家庭において保育を受けることが一時的に困難となった乳児又は幼児(以下「乳幼児」という。)について、主として昼間において、保育所、幼稚園、認定こども園その他の場所において、一時的に預かり、必要な保護を行う事業。</p> <p>4 実施方法 (1) 一般型 ① 実施場所 保育所、幼稚園、認定こども園、地域子育て支援拠点又は駅周辺等利便性の高い場所など、一定の利用児童が見込まれる場所で実施すること。 ② 対象児童 主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児とする。</p>

改正後	改正前
	<p>また、当分の間、「『待機児童解消に向けて緊急的に対応する施策について』の対応方針について」（平成 28 年 4 月 7 日雇児発 0407 第 2 号）に基づき、待機児童解消に向けて緊急的に対応する施策（以下「緊急対策」という。）を実施する市町村に限り、子ども・子育て支援法（平成 24 年法律第 65 号）第 19 条第 1 項第 2 号又は第 3 号に掲げる小学校就学前子どもに該当する支給認定子ども（以下「保育認定子ども」という。）であって、同法第 27 条に規定する特定教育・保育施設又は同法第 29 条に規定する特定地域型保育事業者（以下「保育所等」という。）を利用していない児童について、保育所等への入所が決まるまでの間、定期的に預かること（以下「緊急一時預かり」という。）も本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。</p> <p>③ 設備基準及び保育の内容 児童福祉法施行規則（昭和 23 年厚生省令第 11 号。以下「規則」という。）第 36 条の 35 第 1 号イ、ニ及びホに定める設備及び保育の内容に関する基準を遵守すること。</p> <p>④ 職員の配置 規則第 36 条の 35 第 1 号ロ及びハの規定に基づき、乳幼児の年齢及び人数に応じて当該乳幼児の処遇を行う者（以下「保育従事者」という。）を配置し、そのうち保育士を 1 / 2 以上とすること。 当該保育従事者の数は 2 名を下ることはできないこと。ただし、保育所等と一体的に事業を実施し、当該保育所等の職員（保育従事者に限る。）による支援を受けられる場合には、保育士 1 名で処遇ができる乳幼児数の範囲内において、保育従事者を保育士 1 名とすることができること。</p> <p>また、1 日当たり平均利用児童数（年間延べ利用児童数を年間開所日数で除して得た数をいう。以下同じ。）がおおむね 3 人以下である場合には、「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準」（平成 26 年厚生労働省令第 61 号。以下「家庭的保育事業等の設備運営基準」という。）第 23 条第 2 項に定める市町村長が行う研修を修了した保育士と同等以上の知識及び経験を有すると市町村長が認めた者（以下「家庭的保育者」という。）を、保育士とみなすことができる。なお、非定期利用が中心である一時預かり事業の特性に留意し、研修内容を設定すること。</p>

改正後	改正前
	<p>(注) 一時預かり事業を実施する保育所、幼稚園及び認定こども園を運営する法人が同一敷地内で放課後児童健全育成事業を実施する場合であつて、放課後児童健全育成事業の利用児童数がおおむね2人以下であるときには、下記(ア)から(エ)までの要件を全て満たすことを条件として、一時預かり事業の実施場所において、両事業の対象児童を合同で保育することを可能とする。</p> <p>(ア) 放課後児童健全育成事業の対象児童(以下「放課後児童」という。)の処遇の実施にあつては、『「放課後児童健全育成事業」の実施について』(平成27年5月21日雇児発0521第8号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知)の別紙「放課後児童健全育成事業実施要綱」によること。ただし、職員体制については、2名以上とし、うち1名は放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準(平成26年厚生労働省令第63号)第10条第3項第1号に該当するもの、もう1名は同項第1号から第9号のいずれかに該当するものとし、いずれも「職員の資質向上・人材確保等研修事業の実施について」(平成27年5月21日雇児発0521第19号雇用均等・児童家庭局長通知)の別添9「放課後児童支援員等研修事業実施要綱」の「I 放課後児童支援員認定資格研修事業(都道府県認定資格研修ガイドライン)」に基づき都道府県知事が行う研修を修了したもの(平成32年3月31日までに修了することを予定しているものを含む。)とする。</p> <p>(イ) 一時預かり事業に関する保育従事者の配置基準は、上記④の一段落目の記載に関わらず、乳児おおむね3人につき2名以上、満1歳以上満3歳に満たない幼児おおむね3人につき1名以上、満3歳以上満4歳に満たない幼児おおむね10人につき1名以上、満4歳以上の幼児おおむね15人につき1名以上とすること。</p> <p>(ウ) 一時預かり事業に関する保育従事者の数は2名を下ることはできないのが原則であるが、放課後児童の処遇に係る職員2名以上から支援を受けられることを前提に、上記(イ)の基準に基づき保育士1名で保育ができる乳幼児数の範囲内において、保育士1名とすることができるとする。</p> <p>(エ) 一時預かり事業の対象児童に対する処遇に支障がないことに加え、</p>

改正後	改正前
	<p>低年齢児と小学生が同一場所で活動することを踏まえた安全な保育環境が確保されていると市町村が認めていること。</p> <p>⑤ 研修 保育士以外の保育従事者の配置は、以下の研修を修了した者とする こと。</p> <p>ア 「子育て支援員研修事業の実施について」（平成 27 年 5 月 21 日雇 児発 0521 第 18 号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）の別紙 「子育て支援員研修事業実施要綱」の 5（3）アに定める基本研修及 び 5（3）イ（イ）に定める「一時預かり事業」又は「地域型保育」 の専門研修を修了した者。</p> <p>イ 子育ての知識と経験及び熱意を有し、「家庭的保育事業の実施につ いて」（平成 21 年 10 月 30 日雇児発 1030 第 2 号厚生労働省雇用均 等・児童家庭局長通知）の別紙「家庭的保育事業ガイドライン」（以 下「ガイドライン」という。）の別添 1 の 1 に定める基礎研修と同等 の研修を修了した者。ただし、平成 32 年 3 月 31 日までの間に修了し た者とする。なお、非定期利用が中心である一時預かり事業の特性に 留意し、研修内容を設定すること。</p> <p>⑥ 基幹型施設 土曜日、日曜日、国民の祝日等の開所及び 1 日 9 時間以上の開所を行 う施設について、基幹型施設とすることができる。</p> <p>(2) 幼稚園型 I ((3) を除く)</p> <p>① 実施場所 幼稚園又は認定こども園（以下「幼稚園等」という。）で実施するこ と。</p> <p>② 対象児童 主として、幼稚園等に在籍する満 3 歳以上の幼児で、教育時間の前後 又は長期休業日等に当該幼稚園等において一時的に保護を受ける者。</p> <p>③ 設備基準及び教育・保育の内容 規則第 36 条の 35 第 2 号イ、二及びホに定める設備及び教育・保育の 内容に関する基準を遵守すること。</p> <p>④ 職員の配置 規則第 36 条の 35 第 2 号ロ（附則第 56 条第 1 項において読替え）及 びハに基づき、幼児の年齢及び人数に応じて当該幼児の処遇を行う者</p>

改正後	改正前
	<p>(以下「教育・保育従事者」という。)を配置し、そのうち保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者を1/2以上とすること(ただし、当分の間の措置として1/3以上とすることも可)。当該教育・保育従事者の数は2名を下ることはできないこと。ただし、幼稚園等と一体的に事業を実施し、当該幼稚園等の職員(保育士又は幼稚園教諭免許状所有者に限る。)による支援を受けられる場合には、保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者1名で処遇ができる乳幼児数の範囲内において、教育・保育従事者を保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者1名とすることができること。</p> <p>また、保育士又は幼稚園免許状所有者以外の教育・保育従事者の配置は、アに掲げる者又はイからエまでに掲げる者で市町村が適切と認める者とする。なお、イからエまでに掲げる者を配置する場合には、園内研修を定期的実施することなどにより、預かり業務に従事する上で必要な知識・技術等を十分に身につけさせる必要があること。</p> <p>ア 市町村長等が行う研修を修了した者 イ 小学校教諭普通免許状所有者 ウ 養護教諭普通免許状所有者 エ 幼稚園教諭教職課程又は保育士養成課程を履修中の学生で、幼児の心身の発達や幼児に対する教育・保育に係る基礎的な知識を習得していると認められる者 オ 幼稚園教諭、小学校教諭又は養護教諭の普通免許状を有していた者(教育職員免許法(昭和24年法律第147号)第10条第1項又は第11条第4項の規定により免許状が失効した者を除く。)</p> <p>⑤ 研修</p> <p>4(2)④アの「市町村長等が行う研修を修了した者」は、以下の者とする。</p> <p>ア 「子育て支援員研修事業の実施について」の別紙「子育て支援員研修事業実施要綱」の5(3)アに定める基本研修及び5(3)イ(イ)に定める「一時預かり事業」又は「地域型保育」の専門研修を修了した者。</p> <p>イ 子育ての知識と経験及び熱意を有し、ガイドラインの別添1の1に定める基礎研修と同等の研修を修了した者。ただし、平成32年3月31日までの間に修了した者とする。なお、非定期利用が中心である一</p>

改正後	改正前
	<p>時預かり事業の特性に留意し、研修内容を設定すること。</p> <p>(3) 幼稚園型Ⅱ（当分の間の措置として、保育を必要とする2歳児の受け皿として定期的な預かりを行うものをいう。以下同じ。）</p> <p>① 対象自治体 「子育て安心プラン」の実施方針について」（平成29年12月21日子保発1221第1号）別添の1に定める市町村。</p> <p>② 実施場所 幼稚園で実施すること。</p> <p>③ 対象児童 満3歳未満の小学校就学前子ども（子ども・子育て支援法第6条第1項に規定する小学校就学前子どもをいう。）であって、子ども・子育て支援法施行規則（平成26年内閣府令第44号）第1条で定める事由により家庭において必要な保育を受けることが困難であるものとして市町村に認定を受けた2歳児（注）。なお、2歳の誕生日を迎えた時点から随時受け入れることや、当該2歳児が3歳の誕生日を迎えた年度末まで継続して受け入れることも妨げない。 （注）受入れ時点だけではなく、受入れ期間中においても同施行規則第1条で定める事由に該当し続けていることを要件とする。</p> <p>④ 設備基準及び保育の内容 （2）③に同じ。なお、保育所保育指針等や「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年3月31日文部科学省初等中等教育局長通知）を踏まえ、2歳児の発達段階上の特性を踏まえた保育を行うよう留意すること。</p> <p>⑤ 職員の配置 （2）④に同じ。ただし、当該幼児の処遇を行う者の中には、必ず保育士を配置すること。</p> <p>⑥ 研修 （2）⑤に同じ。</p> <p>⑦ 保育時間・開所時間・開所日数 児童福祉施設の設備及び運営に関する基準（昭和23年厚生省令第63号）第34条の規定に準じ、保育時間は1日につき8時間を原則とすること。</p>

改正後	改正前
	<p>開所時間・開所日数については、③の対象児童に対する保育を適切に提供できるよう、保護者の就労の状況等の地域の実情に応じて定めなければならないこと。</p> <p>なお、③の対象児童が幼稚園に入園した後においても、引き続き受入れが可能となるよう、保護者の就労の状況等を踏まえて、適切に預かり保育を行うこと。</p> <p>⑧ 実施方法</p> <p>ア 市町村は、管内の幼稚園と相談のうえ、あらかじめ、各幼稚園における受入枠を設定すること。</p> <p>イ 市町村は、3号認定を行う際に、保護者の本事業の利用希望を把握したうえで、保護者に対する情報提供等を丁寧に行うとともに、各幼稚園に対して適切な受入れの要請を行うこと。</p> <p>ウ 要請を受けた各幼稚園は、保護者からの利用の申込みについて、受入枠の範囲では、正当な理由がなければ、これを拒んではならないこと。また、受入枠を超える申込みがあった場合には、保育の必要度の高い者から優先して受入れを行うこと（この場合において、保育の必要度が同順位の者がいるときは、それらの者のうちから、各施設において公正な方法により受入れ対象者を決定することとして差し支えないが、この方法によっても、保育の必要度に応じた順位は常に優先する）。</p> <p>エ 幼稚園は、受入れ対象者が決定した段階で、市町村に報告すること（受入枠を超える申込みがあった場合には、受入れ対象者の決定方法を含めて報告すること）。</p> <p>(4) 余裕活用型</p> <p>① 実施場所</p> <p>下記の施設等のうち、当該施設等に係る利用児童数が利用定員総数に満たないもの。</p> <p>ア 児童福祉法（昭和22年法律第164号）第39条第1項に規定する保育所。</p> <p>イ 就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成18年法律第77号）第2条第6項に規定する認定こども園。</p> <p>ウ 家庭的保育事業等の設備運営基準第22条に規定する家庭的保育事</p>

改正後	改正前
	<p>業所。</p> <p>エ 家庭的保育事業等の設備運営基準第 28 条、第 31 条及び第 33 条に規定する小規模保育事業所。</p> <p>オ 家庭的保育事業等の設備運営基準第 43 条及び第 47 条に規定する事業所内保育事業所。</p> <p>② 実施基準 規則第 36 条の 35 各号に定める設備及び運営に関する基準等を遵守すること。</p> <p>(5) 居宅訪問型</p> <p>① 実施場所 (略)</p> <p>② 対象児童 家庭において保育を受けることが一時的に困難となった乳幼児で、以下のいずれかの要件に該当すること。</p> <p>ア 障害、疾病等の程度を勘案して集団保育が著しく困難であると認められる場合。</p> <p>イ ひとり親家庭等で、保護者が一時的に夜間及び深夜の就労等を行う場合。</p> <p>ウ 離島その他の地域において、保護者が一時的に就労等を行う場合。 また、当分の間、緊急一時預かりも本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。</p> <p>③ 職員配置 職員の配置は次のとおりとする。なお、家庭的保育者 1 名が保育することができる児童の数は 1 人とする。</p> <p>ア 「職員の資質向上・人材確保等研修事業の実施について」(平成 27 年 5 月 21 日雇児発 0521 第 19 号雇用均等・児童家庭局長通知)に定める居宅訪問型保育研修を修了した保育士等を配置すること。</p> <p>イ 都道府県又は市町村において、アの研修の実施体制が整っていない場合には、経過措置として、家庭的保育者基礎研修を修了した保育士、家庭的保育者認定研修及び基礎研修を修了した者又はこれらの者と同等以上と認められる者であって、アの研修体制が整い次第速やかに当該研修を受講し、修了することとしている者を、当該研修を修了するまでの間(概ね 2 年程度)配置することができることとする。</p>

改正後	改正前
<p>(6) 地域密着Ⅱ型 (略)</p> <p>(7) 災害特例型 ① 実施場所 保育所、幼稚園、認定こども園、子ども・子育て支援法第30条第1項第4号に規定する特例保育を行う施設（以下「特例保育施設」という。）又は同法第43条第1項に規定する地域型保育事業所並びに地域子育て支援拠点その他の場所を実施すること。</p>	<p>④ 実施要件 ア 利用にあたっては、市町村と協議のうえ利用の決定を行うこと。 イ 一時預かり事業の他の類型を実施することができない場合に実施すること。</p> <p>(6) 地域密着Ⅱ型 ① 実施場所 地域子育て支援拠点や駅周辺等利便性の高い場所などで実施するものとする。 ② 対象児童 主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児とする。 また、当分の間、緊急一時預かりも本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。 ③ 設備基準及び保育の内容 規則第56条第1項、第4項及び第5項に定める設備及び保育の内容に関する基準に準じて行うこと。 ④ 職員の配置 規則第56条第2項及び第3項の規定に準じ、乳幼児の年齢及び人数に応じて当該乳幼児の処遇を行う者（以下「担当者」という。）を配置すること。 担当者の数は2名を下ることはできないこと。 また、担当者のうち保育について経験豊富な保育士を1名以上配置すること。 ⑤ 研修 保育士資格を有していない担当者の配置は、市町村が実施する研修を受講・修了することを要件とする。</p>

改正後	改正前
<p>② 対象児童</p> <p>ア <u>令和元年台風第19号に伴う災害（以下「台風第19号災害」という。）について災害救助法が適用された市町村（以下、「被災市町村」とする）に居住する世帯に属する子ども・子育て支援法第20条第4項に規定する支給認定子どもであって、台風第19号の影響により、避難し、在籍する同法第27条第1項に規定する特定教育・保育施設、同法第29条第3項第1号に規定する特定地域型保育事業所又は特例保育施設とは別の特定教育・保育施設等を利用する乳幼児。</u></p> <p>イ <u>被災市町村に居住する世帯に属し、主として、幼稚園等に在籍する満3歳以上の幼児で、台風第19号災害の影響により、保護者が復旧活動等を行うために、教育時間の前後又は長期休業日等に当該幼稚園等において一時的に保護を受ける幼児。</u></p> <p>ウ <u>被災市町村に居住する世帯に属し、台風第19号災害の影響により、保護者が復旧活動等を行うために、一時的な預かりが必要な子どもであって、主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児。</u></p> <p>③ 設備基準及び保育の内容、職員の配置及び研修</p> <p>ア及びイに掲げる実施場所の区分に応じ、それぞれア及びイに定める事業類型に関して（1）、（2）及び（6）において定める基準に準じて行う。</p> <p>ア <u>幼稚園以外において実施する場合 一般型又は地域密着Ⅱ型</u></p> <p>イ <u>幼稚園において実施する場合 幼稚園型Ⅰ</u></p>	
<p>5 留意事項 （略）</p>	<p>5 留意事項</p> <p>（1）事故の報告</p> <p>保育中に事故が生じた場合には、「特定教育・保育施設等における事故の報告等について（平成29年11月10日付府子本第912号・29初幼教第11号・子保発1110第1号・子子発1110第1号・子家発1110第1号通知）」に従い、速やかに報告すること。</p> <p>（2）緊急一時預かり</p> <p>緊急一時預かりを実施する場合は、積極的に地域の余裕スペース等の活用を検討するとともに、本来の一時預かり事業の利用者のニーズにも</p>

改正後	改正前
<p>6 保護者負担 本事業の実施に必要な経費の一部を保護者負担とすることができる。<u>ただし、災害特例型については保護者負担を求めないこと。</u> また、居宅訪問型については、利用児童の居宅までの交通費を実費徴収できることとする。 また、緊急一時預かり又は幼稚園型Ⅱの場合に、保護者負担が過大とならないよう配慮すること。</p> <p>7 費用 (略)</p>	<p>十分対応できるよう、供給拡大を図ること。 (3) 幼稚園型Ⅱ 本事業の対象児童について、施設型給付費等を重ねて支給することがないように留意すること。</p> <p>6 保護者負担 本事業の実施に必要な経費の一部を保護者負担とすることができる。 また、居宅訪問型については、利用児童の居宅までの交通費を実費徴収できることとする。 また、緊急一時預かり又は幼稚園型Ⅱの場合に、保護者負担が過大とならないよう配慮すること。</p> <p>7 費用 本事業に要する費用の一部について、国は別に定めるところにより補助するものとする。 なお、4(1)④の注書きにより放課後児童健全育成事業と合同で保育を実施する場合には、それぞれの対象児童の保育の実施に係る費用を按分し、それぞれの事業の対象経費として補助するものとする。</p>

- 27文科初第238号
雇児発0717第11号
平成27年7月17日
- 一 次 改 正 28文科初第519号
雇児発0705第1号
平成28年7月5日
- 二 次 改 正 28文科初第1795号
雇児発0403第22号
平成29年4月3日
- 三 次 改 正 29文科初第1151号
子 発 21 第 8 号
平成29年11月21日
- 四 次 改 正 30文科初第160号
子 発 0510 第 1 号
平成30年5月10日
- 五 次 改 正 30文科初第682号
子 発 0813 第 1 号
平成30年8月13日
- 六 次 改 正 30文科初第1753号
子 発 0329 第 13 号
平成31年3月29日
- 七 次 改 正 元文科初第1067号
子 発 1118 第 1 号
令和元年11月18日

各 都道府県知事 殿

文 部 科 学 省 初 等 中 等 教 育 局 長

厚 生 労 働 省 雇 用 均 等 ・ 児 童 家 庭 局 長

一 時 預 かり 事 業 の 実 施 に つ い て

標記については、今般、別紙のとおり「一時預かり事業実施要綱」を定め、平成27年4月1日から適用することとしたので通知する。

については、管内市町村(特別区を含む。)に対して周知をお願いするとともに、

本事業の適正かつ円滑な実施に期されたい。

なお、本通知の施行に伴い、平成 26 年 5 月 29 日雇児発 0529 第 28 号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「一時預かり事業の実施について」は、平成 27 年 3 月 31 日限りで廃止する。

別紙

一時預かり事業実施要綱

1 事業の目的

保育所等を利用していない家庭においても、日常生活上の突発的な事情や社会参加などにより、一時的に家庭での保育が困難となる場合がある。また、核家族化の進行や地域のつながりの希薄化などにより、育児疲れによる保護者の心理的・身体的負担を軽減するための支援が必要とされている。

こうした需要に対応するため、保育所、幼稚園、認定こども園その他の場所において児童を一時的に預かることで、安心して子育てができる環境を整備し、もって児童の福祉の向上を図ることを目的とする。

2 実施主体

実施主体は、市町村（特別区及び一部事務組合を含む。以下同じ。）とする。

なお、市町村が認めた者へ委託等を行うことができる。

3 事業の内容

家庭において保育を受けることが一時的に困難となった乳児又は幼児（以下「乳幼児」という。）について、主として昼間において、保育所、幼稚園、認定こども園その他の場所において、一時的に預かり、必要な保護を行う事業。

4 実施方法

（1）一般型

① 実施場所

保育所、幼稚園、認定こども園、地域子育て支援拠点又は駅周辺等利便性の高い場所など、一定の利用児童が見込まれる場所を実施すること。

② 対象児童

主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児とする。

また、当分の間、「『待機児童解消に向けて緊急的に対応する施策について』の対応方針について」（平成 28 年 4 月 7 日雇児発 0407 第 2 号）に基づき、待機児童解消に向けて緊急的に対応する施策（以下「緊急対策」という。）を実施する市町村に限り、子ども・子育て支援法（平成

24 年法律第 65 号) 第 19 条第 1 項第 2 号又は第 3 号に掲げる小学校就学前子どもに該当する支給認定子ども (以下「保育認定子ども」という。) であって、同法第 27 条に規定する特定教育・保育施設又は同法第 29 条に規定する特定地域型保育事業者 (以下「保育所等」という。) を利用していない児童について、保育所等への入所が決まるまでの間、定期的に預かること (以下「緊急一時預かり」という。) も本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。

③ 設備基準及び保育の内容

児童福祉法施行規則 (昭和 23 年厚生省令第 11 号。以下「規則」という。) 第 36 条の 35 第 1 号イ、ニ及びホに定める設備及び保育の内容に関する基準を遵守すること。

④ 職員の配置

規則第 36 条の 35 第 1 号ロ及びハの規定に基づき、乳幼児の年齢及び人数に応じて当該乳幼児の処遇を行う者 (以下「保育従事者」という。) を配置し、そのうち保育士を 1 / 2 以上とすること。

当該保育従事者の数は 2 名を下ることはできないこと。ただし、保育所等と一体的に事業を実施し、当該保育所等の職員 (保育従事者に限る。) による支援を受けられる場合には、保育士 1 名で処遇ができる乳幼児数の範囲内において、保育従事者を保育士 1 名とすることができること。

また、1 日当たり平均利用児童数 (年間延べ利用児童数を年間開所日数で除して得た数をいう。以下同じ。) がおおむね 3 人以下である場合には、「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準」 (平成 26 年厚生労働省令第 61 号。以下「家庭的保育事業等の設備運営基準」という。) 第 23 条第 2 項に定める市町村長が行う研修を修了した保育士と同等以上の知識及び経験を有すると市町村長が認めた者 (以下「家庭的保育者」という。) を、保育士とみなすことができる。なお、非定期利用が中心である一時預かり事業の特性に留意し、研修内容を設定すること。

(注) 一時預かり事業を実施する保育所、幼稚園及び認定こども園を運営する法人が同一敷地内で放課後児童健全育成事業を実施する場合であって、放課後児童健全育成事業の利用児童数がおおむね 2 人以下であるときには、下記 (ア) から (エ) までの要件を全て満たすことを条件として、一時預かり事業の実施場所において、両事業の対象児童を合同で保育することを可能とする。

(ア) 放課後児童健全育成事業の対象児童 (以下「放課後児童」とい

う。)の処遇の実施にあたっては、『「放課後児童健全育成事業」の実施について』（平成27年5月21日雇児発0521第8号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）の別紙「放課後児童健全育成事業実施要綱」によること。ただし、職員体制については、2名以上とし、うち1名は放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準（平成26年厚生労働省令第63号）第10条第3項第1号に該当するもの、もう1名は同項第1号から第9号のいずれかに該当するものとし、いずれも「職員の資質向上・人材確保等研修事業の実施について」（平成27年5月21日雇児発0521第19号雇用均等・児童家庭局長通知）の別添9「放課後児童支援員等研修事業実施要綱」の「I 放課後児童支援員認定資格研修事業（都道府県認定資格研修ガイドライン）」に基づき都道府県知事が行う研修を修了したもの（平成32年3月31日までに修了することを予定しているものを含む。）とする。

(イ) 一時預かり事業に関する保育従事者の配置基準は、上記④の一段落目の記載に関わらず、乳児おおむね3人につき2名以上、満1歳以上満3歳に満たない幼児おおむね3人につき1名以上、満3歳以上満4歳に満たない幼児おおむね10人につき1名以上、満4歳以上の幼児おおむね15人につき1名以上とすること。

(ウ) 一時預かり事業に関する保育従事者の数は2名を下ることはできないのが原則であるが、放課後児童の処遇に係る職員2名以上から支援を受けられることを前提に、上記(イ)の基準に基づき保育士1名で保育ができる乳幼児数の範囲内において、保育士1名とすることができることとする。

(エ) 一時預かり事業の対象児童に対する処遇に支障がないことに加え、低年齢児と小学生が同一場所で活動することを踏まえた安全な保育環境が確保されていると市町村が認めていること。

⑤ 研修

保育士以外の保育従事者の配置は、以下の研修を修了した者とする。

ア 「子育て支援員研修事業の実施について」（平成27年5月21日雇児発0521第18号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）の別紙「子育て支援員研修事業実施要綱」の5（3）アに定める基本研修及び5（3）イ（イ）に定める「一時預かり事業」又は「地域型保育」の専門研修を修了した者。

イ 子育ての知識と経験及び熱意を有し、「家庭的保育事業の実施につい

て」(平成 21 年 10 月 30 日雇児発 1030 第 2 号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知)の別紙「家庭的保育事業ガイドライン」(以下「ガイドライン」という。)の別添 1 の 1 に定める基礎研修と同等の研修を修了した者。ただし、平成 32 年 3 月 31 日までの間に修了した者とする。

なお、非定期利用が中心である一時預かり事業の特性に留意し、研修内容を設定すること。

⑥ 基幹型施設

土曜日、日曜日、国民の祝日等の開所及び 1 日 9 時間以上の開所を行う施設について、基幹型施設とすることができる。

(2) 幼稚園型 I ((3)を除く)

① 実施場所

幼稚園又は認定こども園(以下「幼稚園等」という。)で実施すること。

② 対象児童

主として、幼稚園等に在籍する満 3 歳以上の幼児で、教育時間の前後又は長期休業日等に当該幼稚園等において一時的に保護を受ける者。

③ 設備基準及び教育・保育の内容

規則第 36 条の 35 第 2 号イ、ニ及びホに定める設備及び教育・保育の内容に関する基準を遵守すること。

④ 職員の配置

規則第 36 条の 35 第 2 号ロ(附則第 56 条第 1 項において読替え)及びハに基づき、幼児の年齢及び人数に応じて当該幼児の処遇を行う者(以下「教育・保育従事者」という。)を配置し、そのうち保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者を 1 / 2 以上とすること(ただし、当分の間の措置として 1 / 3 以上とすることも可)。

当該教育・保育従事者の数は 2 名を下ることはできないこと。ただし、幼稚園等と一体的に事業を実施し、当該幼稚園等の職員(保育士又は幼稚園教諭免許状所有者に限る。)による支援を受けられる場合には、保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者 1 名で処遇ができる乳幼児数の範囲内において、教育・保育従事者を保育士又は幼稚園教諭普通免許状所有者 1 名とすることができること。また、保育士又は幼稚園免許状所有者以外の教育・保育従事者の配置は、アに掲げる者又はイからオまでに掲げる者で市町村が適切と認める者とする。なお、イからオまでに掲げる者を配置する場合には、園内研修を定期的実施することなどにより、預かり業務に従事する上で必要な知識・技術等を十分に身につけさせる必要があること。

- ア 市町村長等が行う研修を修了した者
- イ 小学校教諭普通免許状所有者
- ウ 養護教諭普通免許状所有者
- エ 幼稚園教諭教職課程又は保育士養成課程を履修中の学生で、幼児の心身の発達や幼児に対する教育・保育に係る基礎的な知識を習得していると認められる者
- オ 幼稚園教諭、小学校教諭又は養護教諭の普通免許状を有していた者（教育職員免許法（昭和 24 年法律第 147 号）第 10 条第 1 項又は第 11 条第 4 項の規定により免許状が失効した者を除く。）

⑤ 研修

4（2）④アの「市町村長等が行う研修を修了した者」は、以下の者とすること。

- ア 「子育て支援員研修事業の実施について」の別紙「子育て支援員研修事業実施要綱」の 5（3）アに定める基本研修及び 5（3）イ（イ）に定める「一時預かり事業」又は「地域型保育」の専門研修を修了した者。
- イ 子育ての知識と経験及び熱意を有し、ガイドラインの別添 1 の 1 に定める基礎研修と同等の研修を修了した者。ただし、平成 32 年 3 月 31 日までの間に修了した者とする。なお、非定期利用が中心である一時預かり事業の特性に留意し、研修内容を設定すること。

(3) 幼稚園型Ⅱ（当分の間の措置として、保育を必要とする 2 歳児の受け皿として定期的な預かりを行うものをいう。以下同じ。）

① 対象自治体

「子育て安心プラン」の実施方針について」（平成 29 年 12 月 21 日子保発 1221 第 1 号）別添の 1 に定める市町村。

② 実施場所

幼稚園で実施すること。

③ 対象児童

満 3 歳未満の小学校就学前子ども（子ども・子育て支援法第 6 条第 1 項に規定する小学校就学前子どもをいう。）であって、子ども・子育て支援法施行規則（平成 26 年内閣府令第 44 号）第 1 条で定める事由により家庭において必要な保育を受けることが困難であるものとして市町村に認定を受けた 2 歳児（注）。なお、2 歳の誕生日を迎えた時点から随時受け入れることや、当該 2 歳児が 3 歳の誕生日を迎えた年度末まで継続して受け入れることも妨げない。

(注) 受入れ時点だけではなく、受入れ期間中においても同施行規則第 1 条で定める事由に該当し続けていることを要件とする。

④ 設備基準及び保育の内容

(2) ③に同じ。なお、保育所保育指針等や「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年3月31日 文部科学省初等中等教育局長通知）を踏まえ、2歳児の発達段階上の特性を踏まえた保育を行うよう留意すること。

⑤ 職員の配置

(2) ④に同じ。ただし、当該幼児の処遇を行う者の中には、必ず保育士を配置すること。

⑥ 研修

(2) ⑤に同じ。

⑦ 保育時間・開所時間・開所日数

児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年厚生省令第63号)第34条の規定に準じ、保育時間は1日につき8時間を原則とすること。

開所時間・開所日数については、③の対象児童に対する保育を適切に提供できるよう、保護者の就労の状況等の地域の実情に応じて定めなければならないこと。

なお、③の対象児童が幼稚園に入園した後においても、引き続き受入れが可能となるよう、保護者の就労の状況等を踏まえて、適切に預かり保育を行うこと。

⑧ 実施方法

ア 市町村は、管内の幼稚園と相談のうえ、あらかじめ、各幼稚園における受入枠を設定すること。

イ 市町村は、3号認定を行う際に、保護者の本事業の利用希望を把握したうえで、保護者に対する情報提供等を丁寧に行うとともに、各幼稚園に対して適切な受入れの要請を行うこと。

ウ 要請を受けた各幼稚園は、保護者からの利用の申込みについて、受入枠の範囲では、正当な理由がなければ、これを拒んではならないこと。また、受入枠を超える申込みがあった場合には、保育の必要度の高い者から優先して受入れを行うこと（この場合において、保育の必要度が同順位の方がいるときは、それらの者のうちから、各施設において公正な方法により受入れ対象者を決定することとして差し支えないが、この方法によっても、保育の必要度に応じた順位は常に優先する）。

エ 幼稚園は、受入れ対象者が決定した段階で、市町村に報告すること（受入枠を超える申込みがあった場合には、受入れ対象者の決定方法を含めて報告すること）。

(4) 余裕活用型

① 実施場所

下記の施設等のうち、当該施設等に係る利用児童数が利用定員総数に満たないもの。

ア 児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号）第 39 条第 1 項に規定する保育所。

イ 就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成 18 年法律第 77 号）第 2 条第 6 項に規定する認定こども園。

ウ 家庭的保育事業等の設備運営基準第 22 条に規定する家庭的保育事業所。

エ 家庭的保育事業等の設備運営基準第 28 条、第 31 条及び第 33 条に規定する小規模保育事業所。

オ 家庭的保育事業等の設備運営基準第 43 条及び第 47 条に規定する事業所内保育事業所。

② 実施基準

規則第 36 条の 35 各号に定める設備及び運営に関する基準等を遵守すること。

(5) 居宅訪問型

① 実施場所

利用児童の居宅において実施すること。

② 対象児童

家庭において保育を受けることが一時的に困難となった乳幼児で、以下のいずれかの要件に該当すること。

ア 障害、疾病等の程度を勘案して集団保育が著しく困難であると認められる場合。

イ ひとり親家庭等で、保護者が一時的に夜間及び深夜の就労等を行う場合。

ウ 離島その他の地域において、保護者が一時的に就労等を行う場合。

また、当分の間、緊急一時預かりも本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。

③ 職員配置

職員の配置は次のとおりとする。なお、家庭的保育者 1 名が保育することができる児童の数は 1 人とする。

ア 「職員の資質向上・人材確保等研修事業の実施について」（平成 27 年 5 月 21 日雇児発 0521 第 19 号雇用均等・児童家庭局長通知）に定める居宅訪問型保育研修を修了した保育士等を配置すること。

イ 都道府県又は市町村において、アの研修の実施体制が整っていない場合には、経過措置として、家庭的保育者基礎研修を修了した保育士、家庭的保育者認定研修及び基礎研修を修了した者又はこれらの者と同等以上と認められる者であって、アの研修体制が整い次第速やかに当該研修を受講し、修了することとしている者を、当該研修を修了するまでの間（おおむね2年程度）配置することができることとする。

④ 実施要件

ア 利用にあたっては、市町村と協議のうえ利用の決定を行うこと。

イ 一時預かり事業の他の類型を実施することができない場合に実施すること。

(6) 地域密着Ⅱ型

① 実施場所

地域子育て支援拠点や駅周辺等利便性の高い場所などで実施するものとする。

② 対象児童

主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児とする。

また、当分の間、緊急一時預かりも本事業の対象とし、この場合の補助単価については別に定めることとする。

③ 設備基準及び保育の内容

規則第56条第1号、第4号及び第5号に定める設備及び保育の内容に関する基準に準じて行うこと。

④ 職員の配置

規則第56条第2号及び第3号の規定に準じ、乳幼児の年齢及び人数に応じて当該乳幼児の処遇を行う者（以下「担当者」という。）を配置すること。

担当者の数は2名を下ることはできないこと。

また、担当者のうち保育について経験豊富な保育士を1名以上配置すること。

⑤ 研修

保育士資格を有していない担当者の配置は、市町村が実施する研修を受講・修了することを要件とする。

(7) 災害特例型

① 実施場所

保育所、幼稚園、認定こども園、子ども・子育て支援法第30条第1

項第4号に規定する特例保育を行う施設（以下「特例保育施設」という。）又は同法第43条第1項に規定する地域型保育事業所並びに地域子育て支援拠点その他の場所で実施すること。

② 対象児童

ア 令和元年台風第19号に伴う災害（以下「台風第19号災害」という。）について災害救助法が適用された市町村（以下、「被災市町村」とする）に居住する世帯に属する子ども・子育て支援法第20条第4項に規定する支給認定子どもであって、台風第19号の影響により、避難し、在籍する同法第27条第1項に規定する特定教育・保育施設、同法第29条第3項第1号に規定する特定地域型保育事業所又は特例保育施設とは別の特定教育・保育施設等を利用する乳幼児。

イ 被災市町村に居住する世帯に属し、主として、幼稚園等に在籍する満3歳以上の幼児で、台風第19号災害の影響により、保護者が復旧活動等を行うために、教育時間の前後又は長期休業日等に当該幼稚園等において一時的に保護を受ける幼児。

ウ 被災市町村に居住する世帯に属し、台風第19号災害の影響により、保護者が復旧活動等を行うために、一時的な預かりが必要な子どもであって、主として保育所、幼稚園、認定こども園等に通っていない、又は在籍していない乳幼児。

③ 設備基準及び保育の内容、職員の配置及び研修

ア及びイに掲げる実施場所の区分に応じ、それぞれア及びイに定める事業類型に関して（1）、（2）及び（6）において定める基準に準じて行う。

ア 幼稚園以外において実施する場合 一般型又は地域密着Ⅱ型

イ 幼稚園において実施する場合 幼稚園型Ⅰ

5 留意事項

（1）事故の報告

保育中に事故が生じた場合には、「特定教育・保育施設等における事故の報告等について（平成29年11月10日付府子本第912号・29初幼教第11号・子保発1110第1号・子子発1110第1号・子家発1110第1号通知）」に従い、速やかに報告すること。

（2）緊急一時預かり

緊急一時預かりを実施する場合は、積極的に地域の余裕スペース等の活用を検討するとともに、本来の一時預かり事業の利用者のニーズにも十分対応できるよう、供給拡大を図ること。

(3) 幼稚園型Ⅱ

本事業の対象児童について、施設型給付費等を重ねて支給することがないよう留意すること。

6 保護者負担

本事業の実施に必要な経費の一部を保護者負担とすることができる。ただし、災害特例型については保護者負担を求めないこと。

また、居宅訪問型については、利用児童の居宅までの交通費を実費徴収できることとする。

なお、緊急一時預かり又は幼稚園型Ⅱの場合に、保護者負担が過大とならないよう配慮すること。

7 費用

本事業に要する費用の一部について、国は別に定めるところにより補助するものとする。

なお、4(1)④の注書きにより放課後児童健全育成事業と合同で保育を実施する場合には、それぞれの対象児童の保育の実施に係る費用を按分し、それぞれの事業の対象経費として補助するものとする。